

大地

第 26 号
1998. 5. 15.
浄 國 寺
☎(23)5724

俳句 八句

山崎 睦

我が歩幅覚えし犬と小春道

こざっぱり生きてゆきたし寒椿

降り暗らむ雪に心は暗からず

雪降れば降ったで雪の遊びあり

バス降りし眼に早春の海の色

北窓に日脚戻りて春ちかし

花の雲城址を包みこんで居り

声高に植木を値切る花の客

浄國寺同朋の会のお知らせ

「同一念仏して別の道なきが故に、遠くに通ずるに、それ四海の内みな兄弟となる」(浄土論注)

まもなく一年になります。昨年の六月より浄國寺同朋の会を始めました。毎月の第二日曜日の朝七時半(冬季は八時)に声明(しょうめよう)の練習をして、お話を聞いて、楽しくお茶飲みながら話をする会です。さらに講師の先生によるオカリナの演奏があります。会の時間はおよそ一時間程。

声明の練習は、「帰命無量寿如来、南無不可思議光」で始まる『正信偈』です。一人で読むのは難しいのですが、皆と一緒にですとそれなりに読めるのです。

講師は三和村の称念寺の保倉様。まだ若く、気さくで朗らかな方です。素晴らしい声で、一つ一つていねいに教えて頂きます。練習の間にされるお話もわかりやすく、しかも面白いものです。

練習の後、お茶を飲みながら聴くオカリナ演奏も楽しみの一つ。
現在は十二名から十五名の方々が参加

されています。
どなたでも参加できますので、毎月の第二日曜日の朝七時半、ぜひ浄國寺同朋の会へご参加ください。

高田別院から火災、お庫裡全焼

さる三月二十一日の夜八時半頃、高田別院御食堂兼高田大谷保育園舎から出火、別院事務所の一部を残し、お庫裡をほぼ全焼いたしました。

昭和二十六年に火災で焼失し、再建された本堂は一部の損傷にとどまり、ご本尊もいち早くお移しできました。

火災の原因は、消防署・警察署による現場検証の結果では「原因不明」としか言いようがない」とのことです。

別院の法務や、保育園については、隣接の施設を借りて平常どおり続けられています。

再建を含む今後の計画については、まだ示されていません。明らかにしただい皆様にお知らせ致しますので、宜しくお願ひ申し上げます。

思うままに

御殿山 坂本柚三子

その一 四角な顔

私は私の顔が嫌いである。顔の輪郭が、四角なところが嫌いなのである。母に似てしまったのである。愚かなことに、ああ整形でもして削りたいなあと思う。丸い顔にあこがれるのである。中学の頃、よく母に文句を言った

「お母さんに似て損をした」と。母は「じゃあ、山田五十鈴の子にでも生まれてくればよかったね」とよく笑っていた。

でも良くしたもので、長い顔(ちよつと馬ずら)の男性が、四角な顔が好きだと言って結婚してくれた。そういえば、寅さん役の渥美清さんも本当に四角だ。でも寅さんの四角な顔は、素敵だった。

顔の輪郭と性格は関係がないと思うのだが、四角な顔は頑固そうで、きつそうで嫌なのである。女らしくないと思ってしまうのだ。雑誌等に四角な顔に似合う服とか載っていると、本当に四角に書いてあるから嫌である。

ああ、でもどう眺めても賞味期限の切れた顔である。今さら言ってもはじまら

ない。できるだけ女らしく、しなやかに生きていこう。テレビで見た顔をすっきりさせる「顔面体操」でもしながら

その二 母のこと

母は七十五歳で生涯を終えた。四年前だ。母はとても太っていた。母が生きている時から、絶対私はあんな不格好にはなるまいと思っていたのだが、最近の私の写真を見ると、ヤセとデブの違いはあるが実によく似ている。話の仕方も、ハツと気が付くと母にそっくりである。

母のいやだと思っていた所が、そっくりになつてきているのである。つれあいを亡くしたのも、二人とも四十五歳だ。

「親・特に母は、そばにいるとうるさく、離れると恋しく、死なれて初めて自分にとつて絶対者になるものだ」とある人が書いておられたが本当にそうだと思う。死なれてみて、母がいつそう好きになった。母が生きている時は否定していた生き方も、それなりに素晴らしく思えるのだ。私が年を取ったせいもあるのだろうが。

母が少しボケて入院した時、私が病院にいくと、看護婦さんが、「だれだかわ

かりますか？」と聞かれた。母は「柚三子です。娘です」と笑いながら答えてくれた。あの時の顔が忘れられない。

入院して「あんたと一緒に帰りたい」と言った母。あの時に病院からつれて帰ってあげられなかったことを許してほしい。

母が老いていくのを許せなくて、随分怒ったり、ひどいことを言ったりした。母は許してくれているだろうか。いろいろ許しを乞うことばかりだ。ごめんさい。

母と娘とは不思議なものだ。いろいろ反発しながら、だんだん似ていく。でも私は、なかなか母を超すことができないでいる。

私の娘二人は、私をどんなふうに見ているだろうか？

※屈託なく朗らかな人とは、坂本さんのためにある言葉、笑顔の素敵な方です。
子供さんも結婚され、少し長い顔？のご主人を亡くされた後はお一人住まい。美しく歳を重ねておられます。

ペットの死と

孫の悲しみ

十日市 長谷川 正

私の外孫に陽子という小学五年の娘がおります。

小学校入学の記念に「インコ」を一つがい買ってやりました。しかし、団地のアパートではペットは飼えず、私の家へ持って来て飼うことにしました。

生き物の好きな娘で、家に来ては面倒をみて可愛がっていました。娘は此の春で小学五年ですので、まる四年たちます。今年の冬は特に寒い日が続きました。

夕暮れには毛布を掛けては暖を取っていたのですが、二月の寒い朝。一羽のインコが死んでしまいました。陽子には知らせずに、そっと葬ってやりました。木の板に「インコの墓」と書き、埋めた植木の下に建ててやりました。

四月、春休みに娘がやって来ました。畑で葡萄の棚直しをしている私の所に来て「じいちゃん、インコ一羽どうしたの」と聞きますので、私は、飼い始めて四年も経ち、インコも弱って死んだことを話しました。

話を聞かされた娘が、とても悲しがっている様子に、私自身深く考えさせられました。

「生あるものの死」という目の前の現実に当たり、子供心に大きなショックを受けたものと思います。その後、娘は家の前にある池の淵に咲いているヒマラヤユキノシタの花を手折り、インコの墓にそなえて、そっと手を合わせているのでした。

仲良くしていたペットの死の体験に、子供心にも手を合わせている。その孫娘の姿を見て、私も改めて深く教えられました。

この子の、今後の成長を見守っていきたいと思っております。

※長谷川さんは、長年にわたり自動車学校の教官をされておられました。職業柄というよりも、生来が落ち着いて物事に処すお方です。また農業にも親しみ晴耕雨読の生活。

この原稿は数年前に頂いたもの、小学五年の陽子さんも今は中学一年生です。

自分を信じたい

山崎隆昌

「松の事は、松に習え。
竹の事は、竹に習え」

『去来抄』にある向井去来の言葉です。「農業の事は、大地に習え」「漁業の事は、海に習え」であり「商売の事は、お客に習え」です。ところがテレビ等の情報が氾濫し、コンピュータが人を管理する現代では、人はテレビやコンピュータに習う事になります。

滑稽でバカバカしいものの一つに「コンピューター占い」なるものがあり、これが結構はやると聞きます。

実際にテレビは面白いし、コンピュータは便利です。テレビやコンピュータの無い生活は考えられません。でも、やはり「人間の事は、人間に習え」と思います。人間である自分を信じたいと思うのです。

《あとがき》

「大地」をお届けします。随分おくれた発行となりました。原稿をいただいた坂本様、長谷川様はじめ、皆様に深くお詫びいたします。これから緑葉の美しい季節、楽しみです。(隆昌)

わたしの名前

山崎慎子

わたしの名前は「しずこ」である。漢字で書く場合は「慎子」と書くように両親がつけてくれた。

こどもの頃は、この名前があまり好きではなかった。まず、初めて社会に出た日、つまり小学校の入学式の日、かなり張り切って出かけたにも拘わらず、呼名の時に「シンコサン」と呼ばれたことに心底愕然としたのである。幼稚園に入らなかった分、学校へ行くのを楽しみにしていたのにデバナをくじかれたという思いでいっぱいだったのである。

入学式に付き添ってくれた父が家で待っていた母に、シン子さんと呼ばれて、力ない声でヒョロヒョロと立ち上がったと報告しているのを、くやしい思いで聞いていたのを今でも覚えている。父は言外に、口ほどにもない奴と思っっているらしいと感じたのだった。

好きになれなかった他の理由は、故里が酒田ということもあり、濁りなくきれいに発音して貰いにくいというところにもあった。東北の人間は一般的にサ行の

発音が苦手である。極端な場合はスズコチャンになってしまうのだ。

また、親兄弟が「シーコ」と呼ぶのも断然気に入らなかつた。家の中だけならともかく、友達の前でそう呼ばれることは、その頃の私にとっては屈辱と感ずくくらい厭なことだったのだ。

慎子という名前が好きになったのは十代も終わる頃くらいからであったか。しずこという名の人は沢山いても慎子と書く人はいないらしいと気づいた辺りからである。

口の悪い人は、しず子という名前の人で、静かな人に今迄一度も会ったことがないと愉快そうに笑う。そういえば私自身も静かなしずこさんには、今だにお目にかかっていないような気がする。

しかし名前を問われ漢字を問われた時は迷う事なく「慎しむ、という字です」と告げる。相手よっては「名は体を表すと申しますから」とつけ加えたりもする。

ところで、この五、六年の間に幾通りかの書き違いの宛名を記した手紙を受け取った。それまで読み方を間違えられる

ことはあっても、宛名の誤字にはお目にかかったことがなかったから、これは一体どういふことのあらわれかと、訝しく思っているのだが。

最初は「鎮子」まず音読みにした時の響きが宜しくない。それに意志的な感じもしないではないが、何やら鉄の女というイメージである。

そして「曠子」。つくりの方だけを何となく覚えてくれていて下さったのだろが、それにしても辞書を引くと「カト目を見開き、怒る様」とあるではないか。

極めつけと思われるのは「憤子」。謙遜あるいは卑下すれば、案外これが私の実態を最もよく表しているのかも知れない。

でも、ごく最近の間違ひは二十年来の友人から届いた「静子」。私が秘かに師とも姉とも思っ尊て尊敬し慕っている人である。

鎮子、曠子、憤子、静子とそれぞれのイメージによって書かれたとしても、たとえ慎ましくもないとしても、やっぱり私は慎子である。